

「逢魔が時」

と言うのを初めて耳にしたのは去年の秋。家族でドライブに行った帰り道、さつきまで太陽は明るく頭上で輝いていたと思つたらあつと言う間に西に傾いている。昼間と夜の間時間の。人影や無灯の自転車がわかりづらい。まだ目が慣れていないのか父はいつも以上に真剣に運転に集中している。と、その時、

「逢魔が時じゃけん気をつけてよ。」

母の声がした。

「オウマガトキ？」

初めて聞く言葉に漢字が思い浮かばない。弟も同じ気持ちだったとみえてすぐ質問する。

「オウガマトキって何よ？」

「魔物に逢う時間って書くんよ。こんな夕暮れの時を言うんよ。」

「今の時代に魔物？」

と、思つたけれどふと以前観た映画「陰陽師」が頭に浮かんだ。この時代に生まれた言葉だろうか。

現代よりも数倍夜が濃かった時代。さぞかし人は闇を恐れていた事だろう。真つ暗闇に魔物が潜んでいると考えても不思議ではない。太陽がだんだんと沈み始め真つ暗な夜が始まろうとしている。息を潜めていた魔物たちが活動の準備をする時間。それが

「逢魔が時」

人々は暗闇に畏敬の念を示しこう呼んだのだろうか。

夜は暗いものだとみんな知っているけれど、本当の夜の濃さを知っている人はどれくらいいるのだろう。ぼくの住んでいる町は決して都会では無い。けれど自動販売機や外灯のおかげで夜でも明るい。

以前、岡山に住む友人の家に行った事がある。正真正銘の田舎で山のふもとにある家は友人宅を含め三軒しかない。しかも隣家の距離はかなりある。まさに横溝正史の小説の世界だった。自動販売機も無く外灯も無い。ましてコンビニなんてあるわけが無い。夜、外に出ると月明かりだけが頼りだった。そんな月が雲に隠れると真つ暗になった。どうしようもなく不安になったのを覚えている。昔の人は毎夜暗闇におびえ、見えない魔物におびえていた

のだろう。

現代、夜が明るくなり魔物たちも住みづらくなっている事だろう。建物の陰に隠れ出番を待っているのか。この間の夕暮れ、ぼくは少し遠出をし帰り道を急いでいた。何度も通った道なのに何故か迷ってしまった。気持ちばかりあせりなかなか家にたどり着けない。日はだんだんと傾き薄暗くなっていく。

「逢魔が時だ。」

いつもは片隅で息を潜めている魔物が今日は少しいたずらしたい気持ちになったのか。足を止めて深呼吸してみた。不思議と家路が見えてきた。

「逢魔が時」はまだまだ存在するんだ。

同じ夕暮れを表す言葉に黄昏と言うのがある。薄暗がりです相手の顔がわかりづらい。「誰そ彼は。」と、お互いに問い合わせる言葉からきているらしい。こちらの方は有名で、今も使われている言葉だ。他にも夕べ、夕ましも言うらしい。

ふと窓の外を見上げてみた。美しい満月だ。虫の声も聞こえてくる。家中の電気を消してお月見をするのも悪くない。ぼくは家族を呼ぶために大急ぎで階段を駆け降りて行った。